

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第55回

森の彫刻家 上床利秋

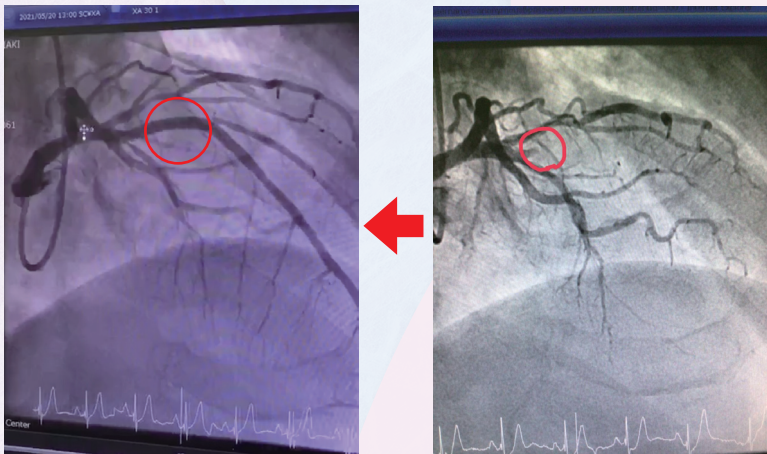
心筋梗塞を経験して

心筋梗塞という病気は、今では死亡率も治療法の改善で減ってきてはいますが、それでも年間15万人の日本人が発症し、そのうちの約30%が亡くなっていると言われています。

5月20日の事でした。「卓球同好会」で楽しく体を動かしている時、私は突然胸を押さえ込まれたような痛みを覚えました。以前から伝え聞いていた心筋梗塞だと判断した

私は救急車を呼んでもらい、霧島市医療センターで緊急手術をしていただいたお陰で命を取り留め、25日間の入院加療で退院。以前と同じように彫刻制作活動も再開することができました。

現代医学の進歩のおかげです。病院の医師、看護師、救急隊員などすべての関係者に心より感謝しています。その時の様子をご報告します。



筆者の心臓のレントゲン映像。赤丸はステント装着部分。右側写真は血管が詰まって血液が流れていないが左側の写真でステントを装着した直後に血流が回復した様子がわかる。

前述のとおり救急車で運ばれた私は、車内の担架で心電図を計られていた。近くで誰かの「こりや、心筋梗塞です。」という声が聞える。心臓付近の強烈な痛みで体中から脂汗が出る。

病院にたどり着くなり、鼻の二つの穴にPCR検査の細長い綿棒のような物をつっ込まれた。長さは15cmくらいあったように覚えている。これがギューンと痛す。

そうして手術台に乗せられた。耳元で担当医師から「胸元が痛くなったのはいつですか?」と、聞かれ、私は「1時半ごろです」と答えた。その時13時頃だったが、それを聞いた先生の表情が笑顔に見えた。その笑顔で私の心は楽になったように覚えている。

「一応了解を得られながらもハサミで衣服を切り取られ、剃毛された。胸の痛みは続く。次に尿管にチューブを20cm程突っ込まれる。これがまたギューンと痛かった。恥ずかしい気持ちよりも、早くどうにかしてくれという気持ちが強かった。

右手首に麻酔を打たれ、いよいよカテーテルがそこから私の体に差し込まれた。相変わらず心臓の痛みは続く。そこに治療担当医師から「これから胸が少し痛くなりますよー。我慢してくださいねー」との声が届く。それはステントを装着する為の前段階としてバルーンと呼ばれる風船を患部血管の中で膨らませるといった意味だった。

その苦しい時間は短いはずだが、患者の私にはとても長い時間に思えた。後日担当医師から伺った話だが、血管の詰まった患部には、30mmの長さのステントが一本使われたそうである。一般的な冠動脈ステント治療で



担当医、河野智紀先生と筆者。笑顔で退院。



入院七日目の自画像

は長さ8mmから38mm程度のステントが用いられるとのこと、割と長めのものであった。それだけ時間がかかったのだろう。その処置が無事に成功すると、やっと自分に穏やかな時間が戻ってきた。「成功しました。終わりましたよ。上床さん」と、医師がそばで呼びかけてくれた。心臓が痛み出してから手術が終わるまで2時間30分を要していた。

心筋梗塞発症の最大の要因は動脈硬化と言われている。その再発防止には処方された薬を服用することはもちろん、食生活の改善と適度な運動と言われている。一病息災、自分の体の内部にも確実に老化が進んでいることを思い知らされた出来事だった

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

ホームページ刷新しました。

<https://douzou.jp/>

上床利秋

検索



バックナンバーも読むことができます。